

ウィリアム・ジェイムズの多元論哲学

山根秀介

長い哲学史のなかで常に優勢を占めてきたのは、一元論的な思考と、それに由来する存在論、宗教論であると言って差し支えないだろう。より純粋なものを追求しようとする傾向を強くもつ哲学的な理性は、世界に満ちる無数の個別的なものの背後に、超越的で絶対的な万物の根源が存在するはずだと考える。それは一神教であるキリスト教と様々な形で関わり結びつくなかでいっそう一元論的傾向を強化していき、世界の「外側」に存在する絶対者としての神がすべての存在者を支配し続べると考えるようになった。私たちの目に映る事物はすべて「一者」、「神」、あるいは他の哲学的・神学的原理の単なる現れでしかない。大雑把な言い方になるが、西洋の哲学において「一なるもの」への志向が一貫して支配的であったと考えることができる。それは哲学が原理、統一を希求する理性の営みであるゆえに必然的なものであった。もちろん散発的にそれをはねのけようとする思想も出てきたが、それが一つの潮流を形成して大きな運動にまで至ることはほとんどなかったと言ってよい。多元論は哲学史においてはあくまでマイナーであり傍流であり続けている。

ウィリアム・ジェイムズは、一元論的哲学に対するオルタナティブとして、多元性を本質とする哲学の可能性を模索した、数少ない哲学者の一人である。本論文はジェイムズの多元論哲学全体を、経験論、認識論、プラグマティズム、宗教論といった諸側面から解明することを目標とする。その際、ジェイムズの多元論哲学は、彼の「改善論」を可能とする諸条件として構築されたと捉えることにしたい。「改善論」とは、人間は自らの行為によって世界の自然的な運行に介入して、より良い方向に導いていくことが可能であるという考えである。本論で扱われるジェイムズ哲学の諸側面は、この改善論が成り立つための前提として考えられるのである。ジェイムズの哲学者としての活動のかなりの部分が、初期から提唱されていた改善論を「証明」することに注がれたという仮説を立てて、議論を進めていきたい。具体的には以下のような章立てとなる。

第一章は、ジェイムズの「根本的経験論」の企図の一つである、「純粋経験」による二元論の打破の企てに焦点を当てる。純粋経験はそれ自体としては主観でも客観でもなく、むしろそのようなものを構成している無属性の素材であり、すべてがそこから生じてくる源泉である。主観・客観という二分法は、中性的な純粋経験が他の純粋経験との関係に入ることによって獲得する認識的な機能に過ぎず、何ら実体的なものではない。次に問題になるのは、

そうした純粹経験からいかにして通常の経験世界、主観世界と客観世界といわれるものが形成されるのかということである。ジェイムズによれば、主観世界の形成においても客観世界の形成においても、決定的な役割を果たすのは「身体」という契機である。一方で身体的な「温かみ」という基準によって純粹経験が「私有化」されることで主観的な自我の歴史が構築され、他方で身体的な行為による「篩い分け」を通して客観的な物理的世界の歴史が構築されていく。私たちは行為するそのたびごとに、身体を通して自己自身と外的世界とを刷新し、創造し直していく。潜在的なものとしての純粹経験から具体的な世界への「現働化のプロセス」は、いつでもこの身体に準拠してなされる。

続く第二章では、純粹経験を素材として形成された世界がいかなる有り様をしているかという問題を取り上げて考察する。それはジェイムズの多元的な存在論と「有限な神」という神観に関わる。私たちが経験する世界は時間的にも空間的にも多元的な構造を備えており、決して超越的な一者に還元されることはない。そしてそのような世界において、神は全知全能の絶対者ではなく、私たちと同じく有限な存在者である。このことを言うための前提となるのが、「非連続性の理論」と「外的関係」という二つの基礎概念であり、これらが世界を多元的なものになっている。「非連続性の理論」とは、世界は有限数で有限量の離散的な単位が寄り集まることによって構成されていると主張するものであるが、そこにはシャルル・ルヌヴィエの存在論からの影響が強く働いている。そしてそうした諸単位は相互に何らかの仕方に関連するのであるが、それは「関係」という言葉で表現される。もろもろの単位、あるいはその単位が形作る個物は、「内的関係」によって接続し「外的関係」によって分離することで、世界を多元的なものになっている。この概念は彼の最大の論敵であった絶対主義者フランシス・ハーバート・ブラッドリーの「関係」概念、とりわけ「内的関係」を批判することによって彫琢されたものである。さらにジェイムズはブラッドリー批判において、彼の哲学の中心を成す一元論的な神概念を解体し、それに抗して「有限な神」という概念を提出する。その神は、この世界のすべてを必然的に決定している超越的一神ではなく、時間的・空間的・能力的に有限な、私たちの協力者としての神、他のあらゆる存在者と同じく、この宇宙を構成するメンバーとしての神なのである。

補論1は、ジェイムズの多元的存在論の特徴をさらに浮き彫りにするために、それをアンリ・ベルクソンの持続の存在論と比較して、両者の強い類似性と根本的な差異及びその起源を明らかにしたい。「持続」とはベルクソンが独自の仕方捉える実在の根源的な在り方であるが、そこにはジェイムズの存在論と同じく、連続性と非連続性が共存する二重構造が見

られる。ベルクソンによれば実在は「持続の諸単位」によって構成されるという非連続的な側面を持つと同時に、そうした諸単位が相互に浸透して繋がりあうという連続的な性質を備える。この点で、ジェイムズとベルクソンの存在論は同様の構造をもつように見えるが、「統一」、「全体」という点に話が及ぶと、根本的にすれ違うことになる。「持続」を構成する要素は各々が全体から規定されると同時に全体を反映してもいる様を示すのだが、これはまさに、ジェイムズが絶対主義的一元論の主張として批判する「各々が全体の中に、全体が各々の中に」を要とする「全体的合流の統合」、「隅から隅まで型の統合」である。それに対してジェイムズの多元的存在論で重視されるのは「連鎖状の統合」であって、そこでは部分的な合流が重なり合うことでゆるやかな集合体が多数構成される。このような差異は両者の「関係」概念の差異に由来する。ジェイムズの根本的経験論では関係はそれが結ぶ項と同じく実在的なものとされていたが、ベルクソンによれば関係は実在に事後的にかぶせられる幻影、知性による構築物、空間的な表象の派生物であり、決してそれ自体の実在性を持ちはしない。この差異は彼らの存在論だけでなく、神概念における差異にもつながる。

第三章ではパースのプラグマティズムと比較することでジェイムズのプラグマティズムの一般的性格を示した上で、そのプラグマティズムが提示する真理論・実在論について議論する。ジェイムズにとって真理とはあらかじめ真であることが決まっているようなものではなく、人間の身体的な行為による動的な過程、流れゆく経験の連鎖を通して、感覚的経験としての「実在」と一致することになった観念である。ところで、ジェイムズのプラグマティズムにおいて「実在」とされるのは、この感覚的経験だけでなく、すでに自分自身で獲得した、もしくは人類の遺産として受け継がれてきた諸々の過去の諸真理である。私たちは自分には如何ともしがたいさまざまな種類の制約を受けつつも、過去に形成された無数の真理を利用することで行為し、時には世界とのより良い接触を可能にする新しい真理を作る。それは過去の真理の集合体に加えられ、そうすることでそれをまた他の人が使えるようになる。このような一連の過程の連鎖によって人間は発達してきたのだとジェイムズは考えている。この「行為」は哲学史上「直観」と呼ばれてきたものにあたり、しかもこの直観は私たちを実在に接触させるだけでなく、実在を作り変えるという役割をも担う。実在は、形而上学的な領域に人間から完全に独立したものとして存在するのではなく、思考するのみならず身体を介して行為する人間により直接働きかけられ、創造されるものとして捉え直されている。このことは「外的関係」によって世界の必然性・決定性が否定されていることによって可能となる。

補論2の目的は、ジョージ・バークリの「非物質論」における「観念」概念との比較によって、ジェイムズの「経験」概念の内実とその哲学的な意義をより明確に示すことである。しばしば言われるように、バークリは「存在するとは知覚されることである」という言葉によって、知覚されている対象から物としての実在性を骨抜きにしたのでは決してない。カント以降主流となったこうしたバークリ評価とは異なり、実際のバークリは、知覚不可能で客観的な「物」と、それによって触発されて生じる主観的な「観念」という二元論を破壊し、それらを同一の平面上に置くことで、私たちが生きる世界をその具体性において捉え、「実在」を私たちの感覚的な次元にまで引き戻そうとしたのである。このバークリの「非物質論」は第一章で見たジェイムズによる物心二元論の打破と非常に近いものである。知覚されている世界の背後にあって、それとは全く異なる次元に属する「真実在」など想定する必要はない。物質的な外界と心理的・表象的な内面とを峻別する二元論は、私たちによって本当に看取されているものをもとに派生的に作り出されたものでしかない。少なくとも私たちが「物質」や「物」と呼んだり「客観的」という形容詞を施したりしている存在は、感覚的性質の集合でしかありえないし、その集合だけが私たちに知られるすべて、すなわちその存在のすべてである。この点においてジェイムズの経験とバークリの観念は一致する。

第四章では、三章で扱ったジェイムズのプラグマティズムを宗教の領域に移した上で、経験と実在という概念を改めて考察する。ジェイムズによれば、宗教的経験によって看取される実在は、普通の意味における感覚によって直接把握できるものではないと同時に、感覚的経験の外側から間接的に「実在についての感覚」を喚起し、それによって私たちが動かすものである。この外側、すなわち宗教的な実在を、ジェイムズは「より以上のもの」、「より高い部分」、「潜在意識的」領域といった言葉で表現する。それは私たちの通常の意識より大きく、それを取り囲み、それと連続し境を接しているのだが、日常的・世俗的な生を生きる限りは、薄い膜によって私たちから隔てられている。しかし宗教的な経験において、この膜が破れ、通常人には及びもつかない力が流れ込んでくる。このような経験は、私たちにいやおうなく別の秩序の実在を突き付け、変容を迫る。私たちが自分のものであると考えている意識に収まっているのは、あくまで広大な意識から、現実の利害関心のための身体的機能によって「限定」されたごく一部分である。この「限定」という事態に注目することで、「潜在意識的」領域と「純粹経験」とが同一視されることになる。これらは同じ一つのものを、一方で宗教的な側面から、他方哲学的な側面とから見ることによって現出する二つの相である。いずれにおいても、通常の意味での個人的な意識にはおさまらない、それを超越した

領野から、その都度身体的な行為によって一時的に自己が、またその自己が相対する客観的事物が作り上げられるという根本的な構造は同じである。ここでジェイムズの形而上学と宗教論とが合流することになる。

第五章の目的は、これもまた「改善論」の前提を成す要素として不可欠である、ジェイムズの「自由意志」論と「新しさ」の概念を検討することである。まず「自由意志」について、ジェイムズは意志が自由であることを「論証」しようとはせず、決定論が抱えている難点を指摘することで、その立場が決して確かなものではないということを示し、間接的にその反対の立場である非決定論を導く。この自由意志の問題は、「新しさ」というより存在論的な性格の強い問題へと発展する。ジェイムズによれば、私たちは時々刻々と流れゆく経験において「新しさ」を感じ取る。その根拠は、過ぎ去ったものは戻らず、同じ経験が繰り返されることは決してないという変化と時間の不可逆性である。そこから、「新しさの純粋な沸騰」が起こる場を「純粋経験」として規定することができる。意識が経験において「新しさ」を覚知するのは「現在」においてであり、またジェイムズの経験論において「現在」は「純粋経験」として考えられるからである。そして、この現在としての「純粋経験」の絶えざる継起のうちに「新しさ」、「創造性」、「偶然性」といった性質が付与されるのは、そうした純粋経験相互を結ぶ関係が「外的」でありうることによる。「外的関係」によって世界は必然的でない仕方、予測不可能な仕方で行進しつつも、そこに主体の努力や行為によって一定の方向づけがなされうる、だから救済が可能であるのだとジェイムズは考えている。

そして終章では、本論文全体の終着点として、ジェイムズの「改善論」の性格、その意味するところを明らかにしたうえで、それがここまでの議論のなかで浮き彫りにしてきたジェイムズ哲学の諸側面の合流点であることを示す。「改善論」が成立するためには、私たちに自由意志が備わっていること、世界はあらかじめ決定されておらず、偶然や創造や新しさが入る余地があること、世界はそのような私たちの行為によって作りかえられうるということ、私たちと「潜在意識的」領域を通じて繋がっている「有限な神々」と協力してそれを行うということが求められる。ジェイムズの「改善論」は、私たち自由なる意志をもった人間が、私たちの隣で私たちと同じ空気を吸い、共に行為することができる神々と協同して、世界のうちに「新しさ」をもたらし、そのたびごとに世界を創造し直していくことができるという力強い宣言なのである。本論文が解明してきたジェイムズの多元論哲学の諸側面がここに収斂する。